

## 經濟と政治との関連の問題（十四）

——いわゆる「トロツキズム」の性格規定——

山 本 二三九

### 三十六

本論稿の冒頭にとりあげられた、『ロシア社会民主主義派の發展諸傾向』と題してドイツ社会民主党の理論的機關誌「ノイエ・ツァイト」（一九一〇年第五〇号）に發表されたトロツキーの世紀的大論説のなかには、肝腎の一九〇五—一九〇七年ロシア第一次革命についての記述は影も形もなく、あるのは、ただ、ポリシェヴィキおよびメンシェヴィキにたいする誹謗と中傷ばかりであり、そして、その誹謗と中傷は、結局のところ、両者とも「政治的に未成熟なプロレタリアート」を「独自に指導し、ひきまわしていこうとする、マルクス主義的インテリゲンツィア」の「閉鎖的な分派」にすぎないものであるということをくりかえし述べたただのことと、とくにポリシェヴィキにたいしては、「党の三階建て構成」とか、「マルクス主義の外観のうしろに隠されたインテリゲンツィアのブルジョア的ジャコバン党的性質」とか、「プロレタリアートの独裁の旗のうしろにプロレタリアートにたいする独裁をかくしている」とか、いわれもない下劣な悪罵をあげせかけているだけである。これらはいずれも、右の大論説のⅡのなかでく

りかえし並べたてられているものであるが、そのⅡの末尾には、一九〇五—一九〇七年革命当時について、つぎのような中傷の文字が連ねられている。

「……ポリシェヴィキもメンシェヴィキも同じく、大衆に革命的スローガンをあたえ、彼らの基本的欲求に応じたひとつの強固な組織をつくったのであるから、これら大衆は、つねに時間的および場所的条件にいたがつて、あるときはポリシェヴィキのまわり、あるときはメンシェヴィキのまわりに結集したのである。大衆は、二つの路線からかれらの階級闘争に役立つものを取りだしたが、それによつてすこしのあいだ、二つの路線がプロレタリアートの奥深いところに堅固な根を張ったかのような幻想が生れたのである」（本誌第二十四卷第四号、二〇ページ、傍点—山本）。

ポリシェヴィキとメンシェヴィキの双方に非難・攻撃を加えてやまない、親メンシェヴィキのヴィーン在住亡命者集団の親方「トロツキー」の右の断定がそもそものという性格のものかということ、事実について見てみよう。

一九一七年一月、スイスのチューリッヒ公会堂でひらかれたスイス青年労働者の集会でレーニンがおこなった『一九〇五年の革命についての講演』は、「血の日曜日」——レーニンの言葉にしたがえば、「正当にもロシア革命の初まりと見られている日」（全集第四版、第二十三卷、二二八ページ）——の十二周年記念日にささげられたものであるが、そのなかで、レーニンはず「血の日曜日」のあらましと労働者の「嘆願書」について説明し、この日の「歴史的意義」をつぎのようにあきらかにしている。

「一人の家父長的な司祭にひきいられた、無教育で文盲の労働者たちのこの嘆願書をいま読むと、奇妙な感じがするであろう。この素朴な嘆願書と、社会平和主義者、すなわち社会主義者であろうとのぞんでいるが実際にはブルジョアの空言家にすぎない人々の、今日の平和決議との類似が、思わず知らず頭にうかんでくるのである。革命前の口

シアの無教育な労働者は、ツァーリが支配階級の、つまり数千の糸で大ブルジョアジーにむすびついており、あらゆる強力手段に訴えて自分の独占、特権、利得をまもうと決意をかためている大地主階級の頭目であることを、知らなかった。「教養の高い」人士——「冗談でしょう！」——と見られたがっている今日の社会平和主義者たちは、帝国主義的強盗戦争をおこなっているブルジョア政府に「民主主義的」講和を期待するのは、血帝を平和的な嘆願書で説きつけて民主主義的改革をやらせることができるという考えと同じくらい愚かなものだということを、知らないのである。

とはいえ、大きな相違は、今日の社会平和主義者の大部分が、おだやかな勧告によって人民を革命的闘争からそれようとする偽善家であるのに、革命前のロシアの無教育な労働者は、彼らが始めて政治意識に目ざめた正直な人々であることを、彼らの行為によって証明したということである。

広大な人民大衆がこのように政治意識と革命的闘争とへ目ざめたことにこそ、一九〇五年一月二十二日の歴史的意義がある。

「ロシアには、まだ革命的人民はない」——ロシアの自由主義者の当時の指導者で、当時非合法で自由な機関誌を国外で発行していたピョートル・ストルューヴェ氏がこう書いたのは、「血の日曜日」の二日まえのことであった。ブルジョア改良主義者のこの「教養の高い」、高慢で、大まぬけな指導者には、文盲な農民の国が、革命的な人民を生みだしうるなどという考えは、それほどばかげたものに思われたのである！ 当時の改良主義者たちは——今日の改良主義者とまったく同じように——、真の革命はおこりえないということを、それほどつよく確信していたのである！

一九〇五年一月二十二日（ロシア曆の九日）以前には、ロシアの革命的諸政党は、ごく少数の人々から成っていた。

——當時の改良主義者は（今日の改良主義者とまったく同じように！）、われわれを罵倒して「宗派」と呼んでいた。数百の革命的組織者、数千の地方組織メンバー、月に一回そこそこ出ない半ダースの革命的新聞——それは、おもに国外で発行され、ひじょうな困難をおかし犠牲をはらってロシアにこっそり持ちこまれていた——、これが、一九〇五年一月二十二日以前のロシアの革命的諸政党とその先頭に立った革命的社会民主党の状態であった。こうしたことが、見識が狭いと同時に高慢な改良主義者たちに、ロシアにはまだ革命的人民はない、と主張する形式的な権利をあたえたのである。

数ヵ月で事態はまったく一変した！ 数百の革命的社会民主主義者は、「突然」数千にふえ、数千のメンバーは、二—三〇万のプロレタリアの指導者となった。プロレタリアの闘争は、五千万から一億にのぼる農民大衆のあいだに大きな動揺を、部分的には革命運動を生み、農民運動は軍隊内に共鳴を呼び、軍隊の叛乱、軍隊の一部と他の一部との武力闘争をもたらした。こうして、一億三千万の住民をもった膨大な国が革命に突入した。こうして眠れるロシアは、革命的プロレタリアートと革命的人民とのロシアになったのである。（前出、二二九—二三〇ページ、傍点——ニン、ゴシック体——山本）。

ここに引用された最後のパラグラフに出てくる「突然」数千にふえた革命的社会民主主義者、「二—三〇万のプロレタリアの指導者となった、数千のメンバー」とは、いったい、どういう「革命的社会民主主義者」であろうか？ それは、新イスクラ派「メンシェヴィキ」であろうか、それとも、ウィーン在住亡命者集団の「指導者」トロッツキー先生の指図のままに動く「メンバー」であろうか？ そのどちらでもないこと、「革命的社会民主主義者」が

ほかならぬボリシェヴィキを指したものであることは、いわずしてあきらかである。とすれば、さきの、トロツキーが大論說の中で書きたてている中傷と非難は、まったくの、たゞ、完全な捏造にすぎない、ということも、おのずからあきらかとなる。レーニンは、右の引用個所にひきつづいて、

「この推移〔『発展—山本』を研究し、その可能性、いわばその方法または経路を、理解しなければならない」  
(前出、二三二ページ)

と述べて、以下、労働者のストライキ、農民運動、兵士の叛乱、「十月と十二月」、ソヴェト、などについてちいさな説明をあたえている。そこで、それらのうち当面関連ある個所について、多少の吟味をくわえてみることにしよう。

レーニンはまず、ストライキについてこう述べている(……は、中略を示す)。

「この推移のもっとも重要な手段は、大衆的ストライキであった。ロシア革命の特異性は、まさに、この革命がその社会的内容から見ればブルジョア民主主義革命であったが、その闘争手段から見ればプロレタリア革命であった点にある。それがブルジョア民主主義革命であったというのは、その直接に目指した目標、またそれが直接に自力で達成できた目標が、民主的共和制、八時間労働日、貴族の広大な大土地所有の没収であったからである。——これらはすべて、一七九二—九三年のフランスのブルジョア革命が大部分実現した方策であった。

それと同時に、ロシア革命は、プロレタリアートが指導勢力であり運動の前衛であったという意味だけでなく、プロレタリアに特有な闘争手段、すなわちストライキが、大衆をふるいたさせる主要な手段であり、決定的な諸事件の波状的経過のなかでもっとも特徴的なものであったという意味でも、プロレタリア革命であった。

ロシア革命は、世界史上の大革命のうちで、大衆的政治的ストライキがなみなみならぬ大きな役割を演じた最初の、

——それは、たしかに、最後のものとはならないであろう——革命であつた。じつさい、ロシア革命の諸事件とその政治的形態の変化とは、これらの事件とこの変化との基礎を、ストライキ統計にもとめないかぎり、これを理解するとさえてきないのである。

……わたしは、諸君が運動全体のほんとうの客観的基礎を評価できるようにするため、二、三の大まかな数字をつたえないわけにはいかない。革命前の一〇年間のロシアのストライキ参加者数は、年平均四万三千人であつた。したがって、革命前の全一〇年間を通じてのストライキ参加者の総数は四三万人となる。一九〇五年一月、すなわち革命の最初の一ヵ月間のストライキ参加者数は、四四万人であつた。つまり、ただの一ヵ月間で過去の全一〇年間よりも多かつたのである。

世界のどの資本主義国でも——イギリス、アメリカ合衆国、ドイツのようなもつとも進んだ国でさえ——、一九〇五年のロシアにおきたような大きなストライキ運動は、かつて見られなかつた。ストライキ参加者の総数は二八〇万で、工場労働者総数の一倍半以上であつた！ もちろん、これは、ロシアの工場労働者が、西ヨーロッパの兄弟たちよりも教養があつたとか、強力だつたとか、闘争能力があつたとかいうことを、証明するものではない。その逆が正しいのである。

しかし、それは、およそプロレタリアの眠れるエネルギーがどんなに大きなものでありうるかを、証明している。それは、革命期には、プロレタリアートが、——わたしは、ロシア史のもつとも正確な資料にもとづいて言うのであつて、すこしの誇張もない——ふつうの平穩な時代の百倍も大きな闘争力を發揮できることを証明している。それは、真に偉大な目的のために、真に革命的に闘争する段になれば、プロレタリアートの力の高まりがどんなにすばら

しく、どんなに大規模なものになりうるか、またなるかを、人類は一九〇五年までまだ知っていなかった、ということとを証明している。

ロシア革命の歴史は、最大の粘り強さと最大の犠牲心とを発揮して闘争をおこなったのが、ほかならぬ賃銀労働者の前衛、精鋭分子であったことを、われわれに示している。工場が大きければ大きいほど、ストライキはますます頑強となり、同じ年度内にストライキがくりかえされる場合がますます頻繁となった。……………

ロシアでは——おそらく他の資本主義諸国でも同様であろうが——、金属労働者がプロレタリアートの先進部隊であった。そして、ここでわれわれはつぎのような教訓に富む事実を見るのである。すなわち、一九〇五年には、ロシアの工場労働者全体では、労働者一〇〇人につき一六〇人のストライキ参加者を出した。これにたいして金属労働者は、同じ年に一〇〇人につき三二〇人のストライキ参加者を出した！ある計算によれば、ロシアの工場労働者は、一九〇五年にストライキの結果として一人あたり平均一〇ルーヴリ——戦前の相場に換算すれば約二六フラン——を失った、いわば闘争の犠牲に供したのである。ところが、金属労働者だけをとってみると、その額はこの三倍になる！労働者階級のすぐれた分子は、ためらうものをひきつれ、ねむっているものをめざめさせ、弱いものを激励しながら、前進したのである。

革命期における経済的ストライキと政治的ストライキとの絡みあい、まったく独特のものであった。ストライキのこの二つの形態のもっとも緊密な結合こそが、はじめて運動の強大な力を保証したことは、疑う余地がない。もし、種々さまざまな工業部門の賃銀労働者が彼らの状態の直接の即時の改善を資本家からかちとった実例を、広範な被搾取大衆が毎日まのあたりに見なかったとしたら、この大衆を、革命運動に引きいれることはけっしてできなかった

たであろう。この闘争によって新しい精神がロシアの全人民大衆のなかに入りこんだ。いまはじめて農奴的な、のろした家父長制的な、信心ぶかい、従順なロシアはほんとうに生まれかわった。いまはじめてロシアの人民は、真に民主主義的な、真に革命的な教育を受けたのである。

ブルジョアの旦那衆やその無批判的な盲従者である社会主義的改良主義者があんなにもったいぶって大衆の教育をうんぬんするとき、彼らは、「教育」という言葉で、ふつう、なにか学校教師的なもの、衛学的なもの、大衆を頹廃させるもの、大衆にブルジョアの偏見を植えつけるものを、指しているのである。

大衆の真の教育は、大衆自身の自主的な政治闘争、とくに革命的闘争とはなれて、そのそとでおこなわれうものではなくしてない。闘争がはじめて被搾取者を教育する。闘争がはじめて彼らに彼らの力の限度を示し、彼らの視野をひろめ、彼らの能力をたかめ、彼らの知力を啓発し、彼らの意志をきたえるのである。

金属労働者のストライキでは、一九〇五年全体を通じて政治的ストライキが経済的ストライキより優勢であったことがわかる。……繊維労働者のあいだでは、一九〇五年の初めには経済的ストライキがひじょうに優勢であり、この優勢は、この年の末になってはじめて、政治的ストライキの優勢に転化した。したがって、経済闘争だけが、自分の状態を即時、直接に改善するための闘争だけが、被搾取大衆のもっともおくれた層をふるいたたせることができ、彼らに真の教育をあたえ、彼らを——革命期には——わずか数ヵ月のうちに政治的戦士の軍隊につくりあげるということは、あきらかである。

もちろん、そのためには、労働者の先進部隊が階級闘争を、少数の上層者の利益のための闘争と解しないで——改



良主義者はあまりにもしばしば労働者をだましてそう思いこませているが——、プロレタリアが真に被搾取者の多数者の前衛として現われ、この多数者自身を闘争に引き入れることが必要であった。一九〇五年のロシアではこれがおこなわれた。そして、きたるべきヨーロッパのプロレタリア革命でも、疑いもなく、これがおこなわれなければならないし、また実際におこなわれるであろう（前出、二三—二三四ページ、傍点——レーニン、ゴシク体——山本）。

レーニンによって一九〇五—一九〇七年革命の「発展のもっとも重要な手段」としてここにあげられている大衆的ストライキ、とくに経済的ストライキと政治的ストライキとの絡みあいについて、これまでずっとうまずたゆまず宣伝し、これにむけてプロレタリアートの教育・組織および訓練に全力を傾けてきたのは、いったい、どういう組織であったか？ それは、新イスクラ派「メンシェヴィキであるか、ボリシェヴィキであるか、それとも、両派の上に立っている」と自称するヴィーン在住亡命者集団であるか？ 答えは、いわずしてあきらかである。レーニンのひきいるボリシェヴィキが、ただひとりボリシェヴィキだけが、これをはたしてきたのである。このことは、われわれがすでに論究してきたレーニンの「経済主義にたいする闘争」の過程をかえりみるだけでも、まったく明らかである。レーニンが一九〇二年に発表した名著『なにをなすべきか？、われわれの運動の焦眉の問題』のうちのどのページも、すべてそのためにあてられていると言っても、けっして過言ではない。さらにここでとくと注意すべきは、ここでの

「大衆的ストライキ」という言葉の意味である。それは、けっして大勢の勤労者が参加しているといったようなことではない。それは、直接的に、民主的共和制、八時間労働日、そして貴族の大土地所有の没収を旨指し、それを達成するために勤労大衆がたちがあつたストライキを、まさに革命的ストライキを、より正確には、政治的・革命的・大衆的ストライキをこそ、指して言っているのである。ところで、ここに示された「民主的共和制、八時間労働日、貴

族の大土地所有の没収」の獲得・達成のために精力的な宣伝・煽動をおこなってきたのは、いったい、どの組織であったか？　それが、レーニンのひきいるボリシェヴィキ党以外のなものでもなかったことは、明白である。このことは、われわれがすでに検討しおえた「ロシア社会民主労働党第三回大会の決議」およびこれにかんするレーニンの労作『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』があますところなく、これを実証している。

（159）なお、当面重要とおもわれる個所をこの著作のなから、一、二抜粋して、読者のお目につけよう。

「革命的社會民主主義者は、改良のための闘争を、つねにその活動にふくめてきたし、いまでもふくめている。だが、革命的社會民主主義派が「経済的」煽動を利用するのは、政府に各種の施策を実施せよという要求を提出するためだけでなく、また（そしてまず第一に）この政府が専制政府であることをやめよ、という要求を提出するためである。そればかりではない。革命的社會民主主義派は、この要求を、たんに、經濟闘争を基盤として提出するだけでなく、およそあらゆる社会政治生活の現われを基盤として提出することをも、自分の義務と考えている。一言でいえば、革命的社會民主主義派は、改良のための闘争を、全体にたいする部分として、自由と社會主義とのための闘争に従属させる。ところが、マルトイノフは、政治闘争に、いわばもっぱら經濟的な發展の道を指定しようとして、段階論を別の形で復活させている。彼は、革命的高揚の時機に、改良のための闘争の特別の「任務」と称するものをもちだし、それによって党をうしろへ引きもどし、「經濟主義的」日和見主義と、さらに自由主義的日和見主義とのお先棒をかついでいるのである。」（全集第四版、第五卷、三七六ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本）。

まず勤労大衆の經濟的地位の改善を「具体的に」要求し、そのために「統一戦線」をつくり、「選挙闘争」をやり、うまく「選挙」に勝ったら「民主連合政府」をつくらう、この「民主政府」がなにを、どのようにやるかは、その段階で——勤労大衆の総意（!?）にしたがって——きめることにしましょう。——これは今日の日本での自称「前衛党」の典型的な日和見主義的「段階論」である。こういう「自由主義的」「民主主義的日和見主義のお先棒をかつぐ連中が、革命的マルクス主義者に「教条主義者」というレッテルをおしつけてこれを攻撃しているのは、つぎのレーニンの文章が示しているようにメンシェヴィキ・マルトイノフが「教条主義者」、「偏狭な正統派」に悪口をついている当時の光景を再現しているものといつてよい。

「マルトイノフ自身があげた、失業や飢饉の克服のための「施策」というあの例でも、とりあげてみたまえ。『ラボーチェエ・デロー』は、同誌の約束から判断すると、「目に見える成果を約束する」「立法上および行政上の諸施策の具体的な」「要求」をつくりあげ、仕上げる仕事に没頭しているのに、「あいかわらず教条の革命化を生活の革命化よりも重視する」「イスクラ」は、失業と全資本主義制度との切っても切れない関連を説明することに努力し、「飢饉は進行している」と警告し、警察の「飢えた人々にたいする闘争」や言語同断な「臨時懲役規制」を暴露し、また『ザリヤー』は、『国内評論』から飢饉をとりあつかった部分を別にして、煽動パンフレットとして発行したのである。だが、おお、なんということだろう、そのばあいにも、この手のつけられない偏狭な正統派の連中、「生活そのもの」の命令に耳をかそうとしない教条主義者たちは、なんと「一面的」だったことか！ 彼らの論文のどのひとつにも、——じつにひどいではないか！——「目に見える成果を約束する」ただ一つの——えっ、あろうことかあるまいことか、まったくただ一つの「具体的な要求」もなかったのだ！ 哀れな教条主義者たちよ！ こんな連中は、すべからくりチーフスキーやマルトイノフというような人々のところに入門させて、戦術とはなんとかなんとかで成長の過程であるとか、経済闘争そのもの、に政治性をあたえることが必要であるとかいうことを、納得させるべきだ！」（前出、三七七—三七八ページ、傍点およびゴシック体——レーニン）。

「マルトイノフは、『イスクラ』に反対して、「労働者大衆の積極性をたかめる」彼の「理論」を提出しながら、実際には、この積極性をひくめようという志向を暴露した。というのは、彼が、このような積極性を呼びさます手段または舞台として望ましく、とくに重要で、「もっとも広範に適用されるべき」ものである、と宣言したのは、経済主義者の全部がそのまえにはいつくばっているあの経済闘争だからである。この謬見は、けっしてひとりマルトイノフに特有のものではないからこそ特徴的なのである。実際には、「労働者大衆の積極性をたかめる」ことは、われわれが「経済を基盤とする政治的煽動」にとどまらなければいかに、はじめてなしとげられることである。だが、政治的煽動の必要な拡大がなされるための基本的な条件の一つは、全面的な政治的暴露を組織することである。このような暴露による以外には、大衆の政治的意識と革命的積極性とを培養することはできない。だから、この種の活動は、全国際社会民主主義派のもっとも重要な機能の一つをなすものである。というのは、政治的自由がえられてさえ、こういう暴露が必要でなくなるわけではけっしてなく、ただその暴露のむけられる範囲がいくらかうつりかわるだけだからである。……もし労働者が、専横と抑圧、暴力と濫用行為のありとあらゆる事例——この事例がどの階級に關係するものであれ——に反応する習慣を、しかも、ほかのどの見地からでもなくまさに社会民主主義的な

見地から反応する習慣をえていないなら、労働者階級の意識は真に政治的な意識ではありえない。もし労働者が、具体的、しかも絶対焦眉の（切実な）政治的事実や事件にもとづいて、他のそれぞれの社会階級の知的・精神的・政治的生活のいっさいの現れを観察することを学ばないなら、——また住民のすべての階級、層、集団の活動と生活のすべての側面の唯物論的分析と唯物論の評価を、実地に応用することを学ばないなら、労働者大衆の意識は、真に階級的な意識ではありえない。労働者階級の注意や觀察力や意識をもっぱらでなく主として、この階級自身に向けさせるような人は、社会民主主義者ではない。なぜなら、労働者階級の自己認識は、現代社会のすべての階級の相互関係についての完全に明瞭な理解——たんに理論的な理解だけでなくさらに——理論的な理解よりもむしろ、といった方が正しくさえある、——政治生活の経験にもとづいてつくりだされた理解——と、切り離せないように結びついているからである。だからこそ、經濟闘争が大衆を政治運動に引きいれるためにもっとも広範に適用されるべき手段である、というわが經濟主義者たちの説教は、その実践的意義からすれば実にはなはだしく有害であり、また実にはなはだしく反動的なのである。社会民主主義者となるためには、労働者は、地主や坊主、高官や農民、学生や浮浪人の經濟的本性と社会的・政治的特性を明瞭に理解し、彼らの強味と弱点を知り、それぞれの階級やそれぞれの層が自分の利己的な意向やほんとうの「はら」をつつみかくすのにつかっている、流行文句やありとあらゆる詭弁を見ぬくことができ、という制度・機関や法律があれこれの利害を反映しているか、しかもまさにどのよう<sup>に</sup>反映しているかを、見ぬくことができなければならない。ところで、こういう「明瞭な理解」は、どんな本からも借りてくることはできない。そのような理解は、現在われわれのまわりにおきていること、だれもかれもおもいおもいに、かたたり、すくなくもささやきあっていること、これこれの事件、これこれの数字、これこれの裁判の判決、等々に現われていることを、生き生きと描写し、時をうつさず暴露することによってだけ、あたえられうるのである。こうした全面的な政治的暴露こそ、大衆の革命的積極性を培養するに必要な、基本的な条件である」（三八二—三八三ページ、傍点—レーニン、ゴシク体—山本）。

一九〇五—一九〇七年ロシア革命の強力な推進力となった、大衆的ストライキの前代未聞の展開、とりわけ經濟的ストライキと政治的ストライキとの絡みあい、政治的ストライキの優勢という事実こそは、まさしく、レーニンの指導するポリシェヴィキ党が真の革命的前衛党として正しく革命的労働運動を推進してきたものであること、この前衛

党の戦術がまったく正しかったこと、革命的労働者大衆は、ポリシェヴィキ党の指導とその方針のもとに革命運動を展開してきたことを、動かしがたく実証するものといわなければならない。したがって、トロツキーのさきの非難・攻撃がまったくするためにする卑劣な中傷にすぎないこと、トロツキー一派こそ、まさにメンシェヴィキの尻尾にくっついて革命的大衆運動を正しい方向から逸脱させようと狂奔した一味にほかならないこともまた、おのずから明白とならざるをえないのである。

では、農民運動については、どうか？ トロツキーが農民について、例の大論説のなかで一言もふれていないこと、彼の自負する労作『結果と展望』のなかに出てくる農民は、「なかば乞食化した農民」でしかないことは、われわれがすでにみたとおりであって、このような徹底した農民蔑視、あるいは農民蔑視は、彼の小ブル的・俗物的視点にとつて、ひとつの根本的支柱ともなっているものである。だが、はたして、第一次ロシア革命では、ロシアの農民は、「なかば乞食化した農民」としてほとんどみるべき役割をはたしえなかったであろうか？ レーニンとは、さきにあげた講演のなかで、つぎのように述べている（……は中略を示す）。

「一九〇五年初頭には、全国にわたってストライキ運動の最初の大波がおこった。すでにこの年の春、ロシアには、最初の大農民運動——経済的な運動だけでなく政治的な運動——が目ざめた。この転換がどんなに画期的な意義をもっているかは、つぎのことをはっきり意識する人々にしか理解できないであろう。すなわち、ロシアの農民は、ようやく一八六一年に最悪の農奴制から解放されたばかりで、大多数の農民は文盲で、おそるべき困窮のうちにあり、大地主によって圧迫され、坊主によって愚鈍にされ、遠く分かれて住み、ほとんどまったく道路がないために孤立した生活をおくっているということが、それである。

ロシアでは、一八二五年にはじめてツァーリズムにたいする革命運動が現われた。この運動の代表者は、ほとんどまったく貴族であった。それ以来、アレクサンドル二世がテロリストにたおされた一八八一年までは、中産階級級のインテリゲンツィアが運動の先頭に立っていた。彼らは、最高の犠牲心を發揮し、………たしかに、彼らは、——直接にも間接にも——ロシアの人民の将来の革命的教育に貢献した。しかし、彼らは、人民革命を目ざめさせるという彼らの直接の目標をなしとげなかったし、またなしとげることもできなかった。

プロレタリアートの革命的闘争がはじめてそれをなしとげることができた。帝国主義的な日露戦争の恐ろしい教訓に関連して、全国を席捲した大衆的ストライキの波がはじめて、農民の広範な大衆を昏睡から呼びさました。「罷業者」という言葉は、農民のあいだでは新しい意味をもつようになった。………「罷業者」は、それ自身人民の出であり、自分も被搾取者の一員であって、しばしばペテルブルグを追放されて、農村にやってきて、農村の同志たちに、都市をとらえた大火のこと、資本家にも貴族にも銚先きをむけた大火のことを、かたてきかせた。ロシアの農村には、新しい型——若い農民、いわゆる「意識分子」が現われた。彼は「罷業者」とうちとけて話し、新聞を読み、農民に都市の事件をはなしてきかせ、農村の同志たちに政治的要求の意義を説明し、彼らを鼓舞して大地主貴族や僧侶や官吏にたいする闘争にたてさせた。

農民はあつまって群をつくり、彼らの状態をなしあい、しだいに闘争にまきこまれていった。彼らは、群をなし、大地主をおそい、大地主の邸宅や旦那の屋敷に火を放ったり、その貯蔵品を略奪し、穀物その他の食糧をうばい、警察官を免職し、土地の、貴族の巨大所有地の人民への引き渡しを要求した。

一九〇五年の春には農民運動はまだはじまったばかりであった。それは、少数の郡、すなわち郡総数の約七分の一

をとらえたにすぎなかった」(前出、二三四―二三五ページ、傍点―レーニン)。

「農民運動は一九〇五年の秋にはさらに大規模なものになった。全国の郡の三分の一以上が、当時いわゆる「農民騷擾」と本物の農民蜂起を記録した。農民は、約二、〇〇〇の地主屋敷を焼きはらって、貴族の強盗どもが人民から略奪した食糧を自分らのあいだに分配した。

残念なことに、この活動はあまりにも不徹底であった！ 残念なことに、当時農民が破壊したのは、貴族屋敷総数の約一、五分の一にすぎなかった。すなわち、封建的大土地所有という恥ずべきものをロシアの国土の表面から完全に掃除するために破壊しなければならなかったものの一五分の一にすぎなかったのである。また残念なことに、農民の行動はあまりにもばらばらで、非組織的で、あまりにも非攻撃的であった。そして、これが、革命の敗北した根本原因の一つであった」(前出、二四一ページ、傍点―レーニン)。

トロツキーが一九一〇年『ノイエ・ツァイト』誌上に、同志マルトフとくつわを並べて公表した例のポリシェヴィキ打倒の世紀的大論説にたいして、レーニンは、同年末に反駁論文、『ロシアにおける党内闘争の歴史的意思』を発表して、両者の迷論を完膚なきまでに粉砕しているのであるが、そのなかで、トロツキーもマルトフも、そろいもそろって、ロシア革命の経済的内容をまったく理解しえないという点をあきらかにし、とくに、農民蜂起の問題について、つぎのように説明して両者の根本的誤りをついているのである。

「マルトフは、封建制度にたいする農民蜂起の時代のロシアを、とうの昔に封建制を片づけてしまった「西ヨーロッパ」に対比している。これは、歴史的展望の法外な歪曲である。「地主の土地の没収にいたるまでの農民の革命的行動を支持する」という要求をその綱領のうちにいれている社会主義者が「西ヨーロッパ全体に」いるであろうか？

いや、いない。「西ヨーロッパ全体では」社会主義者は、大経営者にたいする小経営者の土地所有をめぐる闘争を、けつして支持していない。この相違はどこにあるか？ それは、「西ヨーロッパ全体では」ブルジョア制度、とくにブルジョアの農業關係がとうの昔に形成され、最後に確立されているのに、ロシアでは、いままさに、このブルジョア制度がど、ようにして、形成されるかという、ことをめぐつて、革命が進行中なのである。……………

メンシエヴィズムの悲喜劇は、まさに、それが革命の最中に自由主義とあいられない命題を採用しなければならなかったことにある。もしわれわれが土地没収をめざす「農民」の闘争を支持するなら、つまりわれわれは、勝利が可能であり、労働者階級と全人民とにとって経済的にまた政治的に有利だととめるわけである。ところで、プロレタリアートに指導される「農民」が地主の土地の没収をめざす闘争で勝利するということは、プロレタリアートと農民の革命的独裁にはかならない（革命時には独裁が必要であるという一八四八年のマルクスの言葉、およびマルクスが独裁の実施によって民主主義を実現しようとのぞんだというのでマルクスを非難した人々にたいするメーリングの正当な嘲笑をおもいおこそう）。

これらの階級の独裁が「経済的發展の全行程に矛盾する」という見解は、根本的に誤っている。まさにその逆である。そのような独裁だけが封建制度のいっさいの残存物をきれいさっぱり一掃し、生産力のもっともすみやかな發展を保証するであろう。これに反して、自由主義者の政策は、ロシアの「経済的發展の行程」を百倍もおくらせるロシアのエンケルの手にこの事業をゆだねるのである。

一九〇五—一九〇七年に、自由主義的ブルジョアジーと農民との矛盾は完全に明るみに出された。一九〇五年の春と秋および一九〇六年の春には農民蜂起は中央ロシアの諸郡の五分の一から二分の一をとらえた。農民は二千におよ



ぶ地主の邸を破壊した（遺憾ながら、これは破壊されるべき数の一五分の一以下である）。ただ、プロレタリアートだけがこの革命闘争を献身的に援助し、それに全面的に方向を示し、それを指導し、それを自分たちの大衆的ストライキと結合したのであった。自由主義的ブルジョアジーは、いまだかつて一度も革命的闘争を援助したことはなく、むしろ農民を「なだめて」地主およびツァーリと「和解」させようとした。ついで、最初の二回の（一九〇六年と一九〇七年の）国会で、議会の舞台で同じことがくりかえされた。自由主義者はいつも農民の闘争にブレーキをかけ、農民を裏切ってきた。そして、ただ労働者議員だけが農民に方向を示し、自由主義者に反対して農民を支持したのであった。農民と社会民主主義者とにたいする自由主義者の闘争は、第一国会と第二国会の歴史全体をみたしている。ボリシェヴィズムとメンシェヴィズムとの闘争は、自由主義者を支持すべきかどうか、農民にたいする自由主義者の主導権を打倒すべきかどうかをめぐる闘争として、この歴史と不可分に結びついている。だから、われわれの分裂をインテリゲンツィアの影響、プロレタリアートの未成熟などによって説明することは、自由主義者のおとぎばなしの子供っぽい幼稚なくりかえしなのである」（前出、第十六卷、三四七—三四八ページ、傍点—レーニン、ゴシク体—山本）。

(160) はじめにみたように、例の大論説の中で、「政治的に未成熟なプロレタリアートにたいする影響力を獲得するための、マルクス主義的に思考するインテリゲンツィアと他の思考方法のインテリゲンツィアとの闘争」ということを執拗にくりかえし並べてているのは、ほかならぬ『新イスクラ』編集局のバライキンことトロツキーそのひとである。それゆえ、このバライキンは、こうしたボリシェヴィキにたいする非難・中傷の言葉を、ブルジョア自由主義派のおとぎばなしから無断借用していることになる。彼が、「半ば乞食化した農民」を政治の舞台から抹殺し、したがってまた「プロレタリアートと農民との革命的民主主義的独裁」のスローガンをまったく根拠のないものとして排撃しつづけているのは、むしろ、ブルジョア自由主義派の尻尾<sup>エビゴキ</sup>としては当然のことといわなければならないのである！。

では、ロシアにおける農民運動にたいして、ボリシェヴィキ党は、どのような方針をとってきたか、といえ、これは、すでに本論稿の「十七」で考察された「社会民主党の綱領草案」のなかに明示されている基本線をかたくまもってきたのであって、その中心思想は「農民が一般に農奴制の残存物に反対し、とくに絶対主義に反対して革命的に闘争する能力をもっているかぎり、労働者党はこの農民を支持することを自分の旗印に書く、ということである」（本誌第二十五巻第四号、一五ページ参照）という、レーニンの言葉に要約されて示されている。しかし、一九〇五年革命に当面してのボリシェヴィキの農民運動にたいする態度をはっきりとらえるためには、なお、レーニンの論文『プロレタリアートと農民』（一九〇五年三月）のなかのつぎの一節をあげておくことが適切とかがえられる。

「農民運動にたいする社会民主労働党の実践上の態度を正確に規定するために、わが党の第三回大会は、農民運動の支持についての決議を採択しなければならない。つぎに示すのは、そういう決議の草案であるが、この決議は、以上述べた、そして社会民主主義的文獻のなかでくりかえし展開されてきた見解を定式化しているものであって、それは、現在、できるだけ広い範囲の党活動家によって討議されなければならない。

「ロシア社会民主労働党は、自覚したプロレタリアートの党として、あらゆる搾取からのすべての勤労者の完全な解放をめざしており、こんにちの社会制度および政治制度に反対するあらゆる革命運動を支持する。それゆえロシア社会民主労働党は、こんにちの農民運動をもまたもつとも精力的に支持し、農民の状態を改善しうるあらゆる革命的政策を主張し、この目的のためには地主の土地の収奪をも辞さない。そのさい、プロレタリアートの階級政党であるロシア社会民主労働党は、農村プロレタリアートを独自の階級として組織することにたゆみなくつとめ、彼らの利害が農民ブルジョアジーの利害と敵対であることを農村プロレタリアートに説明し、ブルジョア社会全体

にたいする農村および都市のプロレタリアートの共同闘争だけが社会主義革命に導くことができ、この社会主義革命だけが貧農の全大衆を貧困と搾取から真に解放できるということを彼らに説明する任務を、一瞬もわすれないであらう。

農民のあいだでの煽動のスローガンとして、またこの運動に最大の意識性をもちこむ手段として、ロシア社会民主労働党は、あらゆる民主主義的改革を全面的に支持するための、またこの改革を個別的に実現していくための革命的農民委員会を即時設立することを、提議する。そして、これらの委員会内でロシア社会民主労働党は、一方では、全農民のあらゆる革命的民主主義的行動において全農民を支持するため、他方では、農民ブルジョアジーにたいする農村プロレタリアートの闘争において農村プロレタリアートの真の利益をまもるために、農村プロレタリアを独自に組織することにとめるであらう」(前出、第八卷、二〇八—二〇九ページ、傍点—山本)。

ロシア第一次革命における農民運動、とくに農民蜂起の広範な展開そのものが、ボリシェヴィキの戦術の基本線にたゞしくそつておこなわれたものであると同時に、ボリシェヴィキのうちたてた基本線が完全に正しいことを実証するものであったこと、したがって、それはまた、新イスクラ派・メンシェヴィキおよびバラライキン一派の「革命闘争」方針の完全な破産とそのブルジョア自由主義派的実体の暴露とを明確にしたものであること、——これらのことは、もはや疑う余地なく明らかであるといつてよい。ところが、労働者の大衆的政治的ストライキと農民運動をたゞしく評価し、これを精力的に支持し指導することができないということは、また、一九〇五年革命の特徴である兵士の叛乱をもたゞしく評価しえないということを意味し、総じて武装蜂起そのものにたいする無理解とその否定とを示すものと考えなければならぬ。たとえバラライキンが、その迷著『結果と展望』のなかで、「プロレタリアートの

武装」とか「プロレタリア独裁」とかいう調子の高い文句を数えきれないほどくりかえし叫びたてようとも、それは所詮煽動政治屋のためにする空文句、根も葉もない大言壮語でしかなく、ブルジョア自由主義派と同じく、人民革命を歪め圧殺するという効果しかもたえない反革命的な空文句にすぎないのである。

一九〇五年六月、戦艦「ボチヨームキン」の叛乱の報をうけとったレーニンは、これを「ストライキ運動と農民運動の波の大きな高まり」がひきおこした「軍服を着た労働者と農民の叛乱」としてとらえ、これに関連して「全人民的な武装蜂起」という緊切な課題について、つぎのように述べている（……は中略部分）。

「オデッサに蜂起がおこり、戦艦「ボチヨームキン」が革命のがわにたつたことは、専制にたいする革命運動の発展において、新しい、巨大な一歩前進を示すものであった。これらの事件は、蜂起の呼びかけと臨時革命政府をつくれという呼びかけ——ロシア社会民主労働党第三回大会という形でプロレタリアートの自覚した代表者たちが人民に訴えた呼びかけ——が、時宜になつたものであったということを、驚くべく急速に確認した。革命の新しい燃えあがりは、これらの呼びかけの実践的意義を照らしだし、ロシアがいま際合している時期における革命的闘士の任務をいっそう正確に規定するよう、われわれに迫っている。

諸事件の自然発生的な進行に影響されて、全人民的な武装蜂起がわれわれの目の前で成熟し、組織されつつある。

一、揆、すなわち、無自覚的な、非組織的な、自然発生的な、ときには粗暴な激昂が、専制にたいする人民闘争の唯一の現われであつた時期は、まだそう遠い過去のことではない。しかし、もっとも先進的な階級であるプロレタリアートの運動としての労働運動は、この初期の段階を急速に脱けだして成長した。社会民主党の意識的な宣伝と煽動は、その効果をあらわした。一揆は、専制にたいする組織的なストライキ闘争と政治的デモンストレーションにとつてか

わられた。野蛮な軍事的制裁は、数年のうちにプロレタリアートと都市平民とを「教育し」、彼らを高度な形態の革命闘争にたいして訓練した。ツァーリの軍隊にたいする群衆の武力反撃の試みははじまった。軍隊にたいする人民の本式の市街戦、バリケード戦がはじまった。ごく最近、カフカーズ、ロツジ、オデッサ、リバウは、プロレタリア的英雄主義と人民の熱意との模範を、われわれに示した。闘争は蜂起に成長転化した。自由の絞刑吏という恥ずべき役割、警察の召使の役割をはたさせられたことは、ツァーリの軍隊そのものの目をも、しだいにひらかないではおかなかった。軍隊は動揺しはじめた。はじめには不服従の個々の場合や、予備兵の不満の爆発や、将校の抗議や、兵士のあいだの煽動や、自分たちの兄弟である労働者たちに発砲することを個々の中隊または連隊が拒否した事件がおこり、ついで、軍隊の一部が蜂起のがわにうつった。

最近のオデッサの諸事件の大きな意義は、ここではじめてツァーリズムの兵力の大きな部分が——一隻の戦艦がそっくり——公然と革命のがわにうつったという、まさにその点にある。政府はこの事件を人民にかくし、水兵の蜂起をそもそものはじめに圧殺するために、気がいじみた努力と、ありとあらゆる術策をもちいた。しかし、なにをやっても役にたたなかった。……ツァーリ政府がさしあたりなしとげることのできたのは、海軍が積極的に革命のがわに移行するのをおさえることが関の山であった。ところで、戦艦「ポチヨームキン」は、いまなお革命の不败の領土としてのこっている。そして、この戦艦の運命がどうであろうと、われわれがここに見るのは、革命軍の中核をつくる試みという、疑う余地のない、もっとも注目すべき事実である。

どのような弾圧も、革命にたいするどのような部分的勝利も、この事件の意義をなくしはしないであろう。第一歩は踏みだされた。ルビコンは渡られた。軍隊が革命のがわにうつったということは、全ロシアの前に、全世界の前

に、銘記されている。黒海艦隊の事件には、かならずや革命軍編成の新しい、いっそう精神的な試みがつづくであろう。いまやわれわれの仕事は、——全力をあげてこれらの試みを支持すること、自由のための闘争における革命軍の全人民的意義をプロレタリアートと農民のもつとも広範な大衆に説明すること、この軍隊の個々の部隊をたすけて大衆を引きつける力をもつ全人民的な自由の旗をおしたてさせること、ツァーリの専制をおしつぶすべき勢力を統合すること、である。

一揆——デモンストレーション——市街戦——革命軍の諸部隊、——これが人民蜂起の發展の諸段階である。いまやわれわれは、ついに最後の段階に到達した。このことは、もちろん、全運動がすでに全体としてこの新しい最高の段階にあるということの意味しない。そうではない。運動のうちにはまだ多くのおくれたものがあり、オデッサ事件にはまだ古い一揆の特徴が明瞭にみられる。しかし、このことは、自然發生的な奔流の波頭がすでに専制の「牙城」の入口までもおしよせたことを意味する。このことは、人民大衆そのものの先進的な代表者たちが、すでに理論的な考慮によってでなしに、もりあがる運動におされて、闘争の新しい、高度の任務、すなわち、ロシア人民の敵との決定的な闘争にまで到達したことを意味する。専制がこの闘争を準備するためにあらゆることをやったのである。専制は多年にわたって人民を軍隊との武装闘争に駆りたててきたが、いまやそれは自分の播いた種を刈りとっている。軍隊そのもののなかから、革命軍の諸部隊が現われている。

このような部隊の仕事は——蜂起を布告し、その他いっさいの戦争にとつてと同様に国内戦にとつても必要な軍事的指導を大衆にあたえ、公然たる全人民闘争の拠点をつくり、蜂起を隣接の地方に波及させ、完全な政治的自由を——はじめは国土の小部分にであつても——保障し、腐敗しきった専制体制の革命的建て直しをはじめ、平時には革

革命的創造活動にあまり参加しないが革命期には前面にたちあらわれる下層人民の革命的創造活動を大規模に展開させることである。これらの新しい任務を意識してはじめて、これらの任務を勇敢にまた広範に提起してはじめて、革命軍の諸部隊は完全な勝利をおさめ、革命政府の支柱となることができる。ところでこの革命政府は、革命軍と同じように、人民蜂起の現段階において緊急に必要なものである。革命軍は、専制政府の残存軍事力にたいする軍事的闘争のために、またこの残存軍事力に対抗して人民大衆を軍事的に指導するために必要である。革命軍が必要なのは、偉大な歴史的諸問題はただ力によつてのみ解決できるのだが、現代の闘争における力の組織とは軍事組織であるからである。……………

革命政府は、人民大衆を政治的に指導するために——はじめには、革命軍がツァーリズムからすでにたたかいた地域の部分において、ついで、国家全体にわたつて——必要である。革命政府は、革命の目標とする政治的改革にただちに着手するために、——革命的な人民自治をうちたてるために、ほんとうに全人民的な、ほんとうの憲法制定議會を召集するために、それなしには人民の意志の正しい表現が不可能であるあの「もうものの自由」を貫徹するために、必要である。革命政府は、実際にかつ最後に専制と絶縁した人民の蜂起した部分を政治的に統合するために、この部分を政治的に組織するために、必要である。もちろん、この組織化はおそらく臨時的なものにすぎないであろうが、それは、人民の意志を保障するため、人民を通じて活動するために、人民の名において権力を掌握する革命政府が、やはり臨時的なものにすぎないのと同じである。しかし、この組織化は、蜂起の成功の一步一步と切りはなしえないように結びつけて、ただちにはじめられなければならない。なぜなら、政治的統合と政治的指導は、一ときも延ばすことはできないからである。ツァーリズムにたいして人民が完全に勝利するためには、蜂起した人民にたいする

政治的指導をこのようにただちに実現することが、人民の勢力にたいする軍事的指導におとらず必要である」(全集第四版、第八卷、五二四—五二七ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本)。

(161) レーニンは、さらに、軍事問題の決定的な重要性を指摘して、

「すこしでも歴史を知り、軍事問題の偉大な達識者エンゲルスから学んだ社会民主主義者はだれひとり、軍事知識が巨大な意義をもっていること、軍事技術と軍事組織とが、偉大な歴史的衝突を解決するために人民大衆と人民諸階級とが利用する武器として、巨大な重要性をもっていることを、かつて疑わなかった。社会民主党は、かつて軍事的陰謀をもてあそぶほどに墮落したことはなく、国内戦がはじまっているという条件が現に存在しないかぎりには、軍事問題を前面におしだしたことは決してない。しかし、いまでは、すべての社会民主主義者が軍事問題を、たとえ第一位におしだしていいにしろ、第一級の地位の一つにおしだしており、軍事問題の研究と、軍事問題を人民大衆に知らせる仕事とを日程にのぼしている。革命軍は、ロシア人民の今後の全運命を決定するために、自由の問題という第一の、もっとも緊切な問題を解決するために、軍事知識と軍事的武器とを実践的に応用しなければならない」(前出、五二八—五二九ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本)と述べ、さらに革命的マルクス主義の見地から戦争の不可避性およびその正当性についてつぎのような明確な教示をあたえているのであるが、これらのレーニンの貴重な教示は、「自由と平和と民主主義」に後生大事としがみついているかつての経済主義的日和見主義者たちや、現代の修正主義的日和見主義者たちにとっては、もちろん、最後まで「聞えない言葉」となっているのである。

「社会民主党は、戦争をセンチメンタルな見地から見たことはかつてなかったし、またいまも見ていない。社会民主党は、戦争を人類の紛争の解決の残忍な方法としてあくまでも非難するが、社会が階級に分かれ、人による人の搾取の存在するかぎり、戦争は不可避であることを知っている。そして、この搾取を絶滅するためには、われわれは、戦争なしにはすまじえないであろう。この戦争をはじめるのは、つねに、どこでも、搾取し、支配し、抑圧する階級自身なのである。戦争にもいろいろある。王朝の利益や、強盗的徒党の貪欲や、資本主義的利得の英雄どもの目的を満足させる冒険としての戦争もある。また、人民の抑圧者と圧制者にたいする戦争もあるが、これが資本主義社会における唯一の正当な戦争である。このような戦争を原則的に非難することができるのは、空想主義者か俗物だけである。いま、ロシアでこの戦争、すなわち人民の自由のための戦



争を回避することができるのは、自由のブルジョア的裏切者だけである。プロレタリアートは、この偉大な解放戦争をロシアではじめた。プロレタリアートは、自分で革命軍の諸部隊を編成し、われわれのがわにうつってきた兵士や水兵の部隊を増援し、農民をひきつれ、国内戦の砲火のなかで形づくられきたえられつつあるロシアの新しい市民を、全人類の自由および幸福のための闘士の英雄主義と熱情とでみたとすることによって、この解放戦争をつづけることができるであろう」(前出、五二九ページ、傍点レーニン、ゴシック体—山本)。

軍服を着た労働者と農民が中心となって広範な水兵と兵士の大衆はしばしば叛乱をおこしたが、しかし、彼らはなすべき任務についての明瞭な自覚に欠けていたために、武装闘争をもっとも精力的につづけることだけが、そして政府を打倒して全国にわたって権力を獲得することだけが、革命の唯一の保証となりうることを理解していなかった。そのために、彼らは、当局の「約束」や説得でなだめられ、当局は貴重な時をかせいで、援軍をつかって叛乱軍の力をばらばらにし、最後には残忍な鎮圧と指導者の処刑をもってこれを片づけた。もっとも肝腎な革命的自覚と決断に欠けていたこと、とりわけ軍服を着た革命的社会民主主義的労働者の組織が欠けていたことが、致命的な弱点であったのである。レーニンはじめてこの弱点を的確にとらえ、その克服のためにボリシェヴィキ党の決意と努力の一半をさくように呼びかけ、そのために精力的にたたかったのであって、新イスクラ派・メンシェヴィキやバラライキンたちは、この問題に一片の注意をすらはらうことをしえなかったのである。

バラライキンことトロツキーは、一九二九年になって嘘八百でかためた「自伝」を作製して売り出したものであるが、その「自伝」のなかにおいても、一九〇五—一九〇七年革命における兵士の叛乱については一言もふれておらず、ひたすらにソヴェトのことを書きつづけ、彼がいかにソヴェトをひきまわしたかというつくり話を得々として並べたてている。では、一九〇五—一九〇七年革命におけるソヴェトとは、どんなものであったか？ レーニンの所論

とバラライキンのつくり話とをくらべてみることにしよう。

### 三十七

一九〇五年十一月、亡命先からロシアにかえる途中、ストックホルムでレーニンは、論文『われわれの任務と労働者代表ソヴェト』を書き、そのなかでソヴェトの意義およびソヴェトと党との関係をつぎのように規定している（…は中略部分を示す）。

「……ラージンが『ノーヴァヤ・ジーズニ』の第五号で、労働者代表ソヴェトか、党かという問題を出しているのは、わたしには正しくないように思われる。問題をこういうふうに提出してはならないし、解答は無条件に労働者代表ソヴェトも、党も、というのでなければならぬと、わたしにはおもわれる。問題——しかもきわめて重要な——問題は、ソヴェトの任務と、ロシア社会民主労働党の任務とを、どう区別し、またどう結合するかということにあるにすぎない。

わたしは、ソヴェトが、どれか一つの政党に完全に同調してしまうのは、合目的でないと考える。……

労働者代表ソヴェトは、ゼネラル・ストライキから、このストライキをきっかけとして、このストライキのために生まれた。ストライキをおこない、勝利のうちにこれをやりとげたのは、だれであったか？ それは、プロレタリアート全体であり、そのなかには、さいわいなことに少数ではあるが、社会民主主義者でないものもある。またストライキが求めたのは、どのような目的であったか？ 経済的なものもあれば、政治的なものもあった。経済的目的は、プロレタリアート全体に、すべての労働者と、幾分は、すべての勤労者にさえ関係があったので、賃労働者だけに関係

していたのではなかった。政治的目的は、全人民に、より正確に言えば、ロシアのすべての民族に関係したものであった。政治的目的は、専制と、農奴制と、無権利状態と、警察の専横のくびきから、ロシアのすべての民族を解放することにあった。

さきにすすもう。プロレタリアートは経済闘争を続行しなければならないであろうか？ 無条件にそうである。この点については、社会民主主義者のあいだには二つの意見はないし、あるはずもない。このような闘争は、社会民主主義者だけが、あるいは社会民主主義の旗のもとだけで、おこなうべきであろうか？ そうではないと、わたしは考える。わたしは、『なにをなすべきか？』のなかで述べた見解、すなわち、労働組合の構成員、したがってまた職業的、経済的闘争の参加者の顔ぶれを、社会民主党の黨員だけにかぎるのは、合目的でないという意見をもちつづけている。職業的組織としての労働者代表ソヴェトは、そのなかに、あらゆる労働者、勤務者、召使い、雇農の代表、全勤労人民の生活改善のためにいっしょにたたかうことをのぞみ、またたたかうことができさえすれば、基本的な政治的良心をもってさえいれば、そうしたすべての人、黒百人組以外のすべての人の代表を入れるように努力しなければならぬと考える。ところで、われわれ社会民主主義者としては、第一には、すべてのわが党組織の全員（できれば）が、あらゆる労働組合に加入するように努力するであろうし、第二には、唯一の首尾一貫した、唯一の真にプロレタリア的な世界観であるマルクス主義を、うまずたゆまずひろめていくために、見解の相違をこえておこなわれるプロレタリアの同僚との共同闘争を利用するように努力するであろう。……………

だが、経済闘争についての問題のこの一半は、比較的簡単なもので、特別な意見の相違などおそらくひきおこしはすまい。政治的指導、政治闘争についての問題の他の一半となると、そうではない。読者をいっそう驚かせる危険をまえ

とするが、しかしわたしはここですぐ言っておかねばならない、労働者代表ソヴェトに社会民主党の綱領を採用したり、ロシア社会民主労働党に加盟したりすることを要求するのは、このばあいにも、合目的でないようにおもわれる。政治闘争の指導のためには、ソヴェト（わたしがつぎに述べようとおもっている方向で改造された）も、党も、どちらも現在ひとしく無条件に必要であるように、わたしにはおもわれる。

ひよっとすると、わたしがまちがっているかも知れないが、わたしには（わたしの手許にある不完全な「文書」だけから得られた情報から察すると）労働者代表ソヴェトは、政治的には臨時革命政府の萌芽と見るべきであろうとおもわれる。ソヴェトは、できるだけすみやかに、自分を全ロシアの臨時革命政府と宣言するか、または（形がちがうだけでまったく同じことだが）臨時革命政府を創設する、しなければならぬように、わたしにはおもわれる。

政治闘争は、いまやまさに、革命と反革命の力がほとんど均衡して、ツァーリ政府には革命をおしつぶす力がある、ないが、革命には黒百人組の政府を一掃する力がまだ十分ないという発展段階に達している。ツァーリ政府の腐敗は、完全である。だが生きながら腐敗していくこの政府は、自分の屍毒でロシアを毒している。ツァーリの反革命勢力の腐敗にたいしては、いまずぐ、ただちに、一刻の猶予もなく、革命勢力の組織化を對置することが、無条件に必要である。この組織化は、ほかならぬ最近すばらしい速さですすんでいる。このことを証明しているのは、革命軍の諸部隊（防衛武装隊その他）の編成であり、プロレタリアートの大衆的な社会主義的諸組織の急速な発展であり、革命的農民による農民委員会の創設であり、苦しく困難ではあるが、しかし正しく、光明にみちた道、自由と社会主義への道を切りひらいている、水兵と兵士の制服を着た、プロレタリア兄弟諸君の自由な会合である。

いままさに欠けているのは、真に革命的な勢力のすべてを、すでに革命的に行動している勢力のすべてを統合する

ことである。欠けているのは、大衆の無条件の信頼を得、わき立つような革命的エネルギーを持ち、組織された革命的社會主義諸政党と密接に結びついた、はつらつとした、新鮮な、人民のなかに深い根をおろしているので強力な、全国的な政治的中心である。このような中心をつくりだすことができるのは、政治的ストライキをみごとにおこない、いま全人民の武装蜂起を組織しており、ロシアのために自由をたたかいとったか、さらに完全な自由をたたかいとろうとしている革命的プロレタリアートだけである。

そこで問題がおきる。労働者代表ソヴェトはこのような中心の萌芽となつてはなぜいけないのか。ソヴェトに席を占めているのが、社會民主主義者だけではないからであらうか？ これはマイナスではなく。プラスである。われわれは、社會民主主義者と革命的ブルジョア民主主義者との戦闘的統一が必要であることを、つねに述べてきた。……われわれは、これまでのように、社會革命黨員の見解を、社會主義的な見解ではなく、革命的民主主義派の見解であると考えている。しかし戦闘的目的のためには、われわれは党の独立性を完全にたもちながら、ともにすすまねばならない、そして、ソヴェトこそ、戦闘的な組織であるし、またそうでなければならないのである。……

わたしの見解では、政治上指導的立場にある革命的中心としては、労働者代表ソヴェトは、広すぎるどころか、狭すぎる組織である。ソヴェトは自分を臨時革命政府であると宣言するか、臨時革命政府をつくるかしなければならぬが、そのためには、どうしても、労働者の新しい代表ばかりでなく、第一には、すでにいたるところで自由をめざしている水兵と兵士の、第二には、革命的農民の、第三には、革命的ブルジョア・インテリゲンツィアの、新しい代表をもひきいなければならない。ソヴェトは臨時革命政府の強力な中核をえらびだし、それをすべての革命的政党と、すべての革命的（もちろん、自由主義的ではなくて革命的なものにかぎるが）民主主義者との代表でみたさなけ

ればならない。われわれは、顔ぶれがこのように広く、雑多であることをおそれず、むしろそれをのぞんでいる。なぜなら、プロレタリアートと農民との統合がなく、社会民主主義者と革命的民主主義者の戦闘的接近がなくては、ロシア大革命の完全な成功は、不可能だからである。これは、明白にきめられた、当面の、実践的任務のための一時的同盟であろう。そして社会主義的プロレタリアートのよりいっそう重要な、根本的な利益の守り手としては、その究極目標の守り手としては、独立した、原則的に一貫したロシア社会民主労働党が断固としてこれにあたるであろう」<sup>(162)</sup>  
 （全集第四版、第十巻、三八ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本）。

（162）レーニンは、さらにひきつづいて、この臨時革命政府が即刻かかげるべき綱領の問題をとりあげ、

「このような綱領は、すでに生活によって完全に提出されている、とわたしはこたえよう。」

と述べ、この綱領の主な内容をつぎのように列挙している。

- 1 ツァーリがきわめて偽善的に約束した政治的自由の完全な実現。言論、集会、出版、結社、ストライキの自由を束縛しているいっさいの法律の廃止と、この自由を制限しているいっさいの制度の廃止。
- 2 自由な武装した人民に依拠し、全権力と全実力とをもっている、真に全人民的な憲法制定議會の召集。
- 3 ツァーリに圧迫されている諸民族へ、真の完全な自由をあたえること。
- 4 八時間労働日、その他資本主義的搾取を制限するために即刻必要な措置。
- 5 すべての土地を農民の手にうつすこと、すべての土地の没収についての農民のあらゆる革命的措置を支持すること。
- 6 革命的農民委員会をいたるところで創設すること。

みられるように、これらはすべて、レーニンによってひきいられたボリシェヴィキ党がずっと前から明確にかかげて、そのために精力的に宣伝し煽動してきたものばかりである。しかも、これらの綱領はすべて、レーニンが明記しているように、ロシアの現実の「生活」によって、勤労大衆の革命運動の広範な展開そのものによって、裏付けられ、確認されているのである。つまり、ロシアの現実の発展そのものが、ボリシェヴィキの戦術の正当性をりっぱに実証しているわけである。この点から

みても、例の大論説のなかで、ボリシェヴィキにあくどい非難・中傷をあげてつづけているトロツキーの下劣きわる煽動政治屋ぶりは、まことに「堂に入った」ものというのほかない。

一九〇五年十二月の武装蜂起の直後、一九〇六年はじめに、レーニンが作製した『ロシア社会民主労働党統一大会に提出すべき戦術綱領』は、つぎの一〇項目、すなわち、民主主義革命の現情勢、武装蜂起、パルチザンの戦闘行動、臨時革命政府と革命権力の地方機関、労働者代表ソヴェト、ブルジョア諸政党にたいする態度、民族的社会民主主義政党にたいする態度、労働組合、国会にたいする態度、党組織の諸原則から成り立っており、当面の情勢の評価から革命的前衛組織が採るべき緊急の戦術を簡潔に述べているものであるが、そのなかで、労働者代表ソヴェトがどのような「位置」をあたえられているかということを、右の『戦術綱領』からの抜粋のつづりあわせによって、示してみることしよう。

〔民主主義革命の現情勢〕から〕

〔四〕一九〇五年末の諸事件の経過——すなわち、都市の大衆的ストライキ、農村の暴動、人民がたたかいたったが政府によって奪いさられた自由を守りぬこうとする渴望からよびおこされた十二月の武装蜂起、つづいて解放運動にたいする苛酷な軍事的抑圧——は、立憲的幻想の無意味なことを示し、自由のためのたたかいが公然たる国内戦の緊張状態にたっている時期には、このような幻想が有害であることに広範な大衆の目をひらかせた。

以上の点を考慮して、われわれは、つぎのことを承認し、大会にこれを承認するよう提案する。

(一) ロシアにおける民主主義革命は、衰退に向っているところか、反対に、新しい高揚に向っているのか、現在の相対的鎮静期は、革命勢力の敗北と見るべきではなくて、革命的エネルギーをたくわえ、すぎさった諸段階の政治

的經驗を撰取し、運動に人民の新しい諸層をひき入れる時期、したがって、新たな、いつそう強力な革命的攻撃の準備期であるとするべきである。

（二）現在の解放運動の主要形態は、似而非立憲主義を基盤とする合法的闘争ではなく、警察的・農奴制的法律を打破し、革命的法律をつくり、人民抑圧機関を強力的方法によって破壊するところの広範な人民大衆の直接の革命運動である」（前出、第十卷、一三〇—一三一ページ、ゴシック体—山本）。

# 「武装蜂起」から

「（三）平和なゼネラル・ストライキは、運動がさらに発展したさいには、不十分なことがわかり、それを部分的にもちいることは、目的を達しないもの、プロレタリアートの勢力を混乱させるものであることがわかった。

（四）革命運動全体は、つづいて、自然発生的な力で十二月の武装蜂起に導いた。そのときにはプロレタリアートばかりでなく、都市貧民と農民との新しい勢力もまた、人民のたたかいとつた自由を反動政府の侵害からまもるために武器をとつた。

（五）十二月蜂起は新しいバリケード戦術を提起し、近代の軍隊にたいしてさえ人民の公然たる武装闘争が一般に可能であることを証明した。

.....

以上の点を考慮して、われわれは、つぎのことを承認し、大会にこれを承認するよう提案する。

（一）武装蜂起は、現在では、自由のための闘争の必要不可欠な手段であるばかりでなく、運動のすでに事実上到達した段階である。そして、この段階は、新しい政治的危機の成長と激化によって、武装闘争の防御的形態から攻撃的



形態へ移行する道をひらいている。

(二)政治的ゼネラル・ストライキは、運動の現段階では、独立の闘争手段としてよりもむしろ蜂起の補助的な闘争手段とみなすべきであり、したがって、このようなストライキの時機の選択と、このストライキのとらえるべき地域や労働部門の選択は、これを主要な闘争形態である武装蜂起の時期と諸条件とに従属させることがのぞましい」(前出、一三一一三二ページ、傍点およびゴシック体―山本)。

〔臨時革命政府と革命権力の地方機関〕から)

「(一)専制政府にたいする革命運動は、武装闘争に移行するさいに、これまでは、ばらばらな地方的蜂起の形態をとってきた。

(二)この公然たる闘争において、地方住民のうちの旧権力にたいして断固たる行動をとりうる分子(ほとんどプロレタリアートと小ブルジョアジーの先進的な層だけであるが)は、事実上、新たな革命権力の萌芽であつた諸組織をつくる必要にせまられた。ペテルブルグ、モスクワその他の都市の労働者代表ソヴェト、ウラヂヴォストク、クラスノヤルスクなどの兵士代表ソヴェト、シベリアと南部地方の鉄道委員会、サラトフ県の農民委員会、ノヴォロシースクその他の都市の市革命委員会、最後に、カフカースと沿バルト地方の農村の選挙された機関が、それである。

(三)蜂起が原始的、萌芽的な形態をとつたのに照応して、蜂起のこれらの機関も同様にばらばらで、偶発的で、その行動は断固としたものではなく、革命の組織された武装力に依拠していなかった。だからこそ、これらの機関は、反革命軍の攻撃にあうやいなや、不可避免的に破壊しなければならぬ運命にあつたのである。

(四)勝利した蜂起の機関としての臨時革命政府のみが、反動のあらゆる抵抗をうちやぶり、選挙前の煽動の完全な

自由を保障し、普通・平等・直接・秘密投票にもとづいて憲法制定議會——實際に人民の専制を實現し、プロレタリアートの最小限の社会・經濟的要求を實現することができる——を召集することができる。

.....

（四）臨時革命政府に社会民主党が参加することが可能かどうかにかわりなく、革命の獲得物をまもり、うちかため、拡大するために、社会民主党に指導される武装したプロレタリアートが臨時政府にたえず圧力をくわえる必要があるという思想を、プロレタリアートのもつとも広範な諸層のあいだに宣伝すべきである」（前出、一三四—一三六ページ、傍点—山本）。

（労働者代表ソヴェト」から）

「（一）労働者代表ソヴェトは、大衆的政治的ストライキを基盤として、広範な労働者大衆の超党派的な組織として、自然發生的に生まれている。

（二）これらのソヴェトは、小ブルジョアジーのもつとも革命的な分子をふくめることにより、また純然たるストライキ組織から全般的革命闘争の機関に転化していくことによって、その構成についても、その活動内容についても、闘争の過程で不可避的に変化する。

（三）これらのソヴェトが革命権力の萌芽であるかぎり、その力と意義はまったく蜂起の力と成功にかかっている。以上の点を考慮して、われわれはつぎのことを承認し、大会にこれを承認するよう提案する。

（一）ロシア社会民主労働党は、超党派的な労働者代表ソヴェトに参加し、各ソヴェトのなかにならずでなければならない強力な党員グループを組織し、それらのグループの活動を、党全体の活動と嚴重にむすびつけて指導しなければなら

ない。

.....  
(三)超党派的な労働者代表ソヴェトは、労働者のできるだけ広範な層を参加させるだけでなく、革命的民主主義派の代表者、とくに農民、兵士、水兵の代表者をも、参加させなければならない。

(四)労働者代表ソヴェトの活動と勢力範囲を拡げるさいには、つぎのことを指摘する必要がある。すなわち、このような機関は、革命軍に依拠しなければ、また政府の権力を打倒しなければ(すなわち、臨時革命政府に転化しなければ)かならず瓦壊をまぬがれない。したがって、人民の武装とプロレタリアートの軍事組織の強化は、どの革命的時期にも、これらの機関の主要な任務の一つと見なければならぬ、ということがそれである」(前出、一三六ページ、傍点およびゴシック体——山本)。

みられるように、レーニンは、「民主主義革命の現情勢」を的確に分析して「自由のためのたたかいが公然たる国内戦の緊張状態に達している時期」であり、「新たな、よりいっそう強力な革命的攻撃の準備期」にあるものと明確に規定し、「武装蜂起」こそは、革命の展開にとって最も中心的な最も強力な手段であり、この武装闘争の展開のなから、必然的に、「新たな革命権力の萌芽」である「労働者代表ソヴェト」が生まれたこと、この「労働者代表ソヴェト」は、「勝利した蜂起の機関としての臨時革命政府」とならなければならないこと、この「革命権力の萌芽」の拡大・強化はもっぱら「人民の武装とプロレタリアートの軍事組織、つまり革命軍の強化」にかかっていることを明確に主張している。このレーニンの主張がいかに正しく現実をとらえた、十分な根拠あるものであったかということは、一九〇五—一九〇七年第一次革命の展開過程そのものが、そしてまたとくに一九一七年二月および十月の革命

の経過が、これを動かしがたく実証しているといつてよい。<sup>(183)</sup>

（183）レーニンが、一九〇五—一九〇七年第一次革命をもって、一九一七年十月革命のための「総稽古」であったと述べていることの根拠のひとつは、まさにこの点に存するといえよう。

ところで、トロツキーは、労働者代表ソヴェトについて、彼の得意とする『結果と展望』のなかで、なんと言っているであろうか？——「労働者代表ソヴェトは、叛乱の時に労働者による権力の掌握の目的のために、あらかじめ準備された陰謀的組織ではなかった。いな、これらは、大衆自身が、彼らの革命的闘争を整合するために、計画的につくりだした組織であった。そして、大衆によって選ばれ、大衆にたいして責任をもつこれらのソヴェトは、疑いもなく民主主義的な組織であり、もっとも断固とした階級的政策を革命的な社会主義の精神において遂行したのである」(ibid., p. 60)——これが、そのすべてである。そして、それからあとの記述では、労働者代表ソヴェトは永久にその姿を消してしまい、これにかわって、「国家権力を掌握したプロレタリアート」、「プロレタリア体制」、「労働者政府」といった、たんなる言葉の羅列があらわれることになっている。諸君、これが、なんと、一九〇五年革命の高揚期にペテルブルグの労働者代表ソヴェトの議長をつとめた男、そして当時レーニンと並ぶもっともすぐれた指導者として自分自身を「自伝」のなかで描きだすことにその「ペロ」をけんめいに走らした男が、その直後にものした「画期的」力作——『結果と展望』——のなかで述べることのできた全部である！しかし、このお粗末さわる説明のなかにも、労働者代表ソヴェトについての煽動政治屋のまったく誤った、反ボリシェヴィキ的理解があきらかに示されている。かれバラライキンは、「権力の掌握を目的とする」ものではなかった、「革命的闘争を整合するための組織」であった、と述べている。それでは、いったい、「権力についたプロレタリアート」は、どうして「権力につく」ことができたのか、例の「労働者政府」は、どこか

ら、どうして生まれてきたのか、説明してみるのがいい。このようなソヴェトの解釈が、さきに示したレーニンの明確な規定——「完全な、計画的な、攻撃的に行動する、蜂起の機関」——「新たな革命権力の機関」——をふみにじるものでしかないことは、全く明らかである。「革命的闘争を整合するための組織」！ なんとおだやかな「民主主義的」組織であることよ。このような小ブル的、俗物的解釈は、彼が終始一貫『新イスクラ』の「編集局のバラライキン」として新イスクラ派「メンシェヴィキとの腐れ縁をすっかりたもっていることの、明白なあらわれとみる」ことができる。なぜならば、メンシェヴィキは、労働者代表ソヴェトをば「革命的自治の機関」と見るのが、精いっぱいのところであつたからである。しかも、かれトロツキーは、一九〇五年十一月十三日、メンシェヴィキと手を結んで政治機関紙『ナチャーロ』を発刊し、ボリシェヴィキの機関紙『ノヴァヤ・ジーズニ』の向うを張つて、メンシェヴィキ的戦術の宣伝にけんめいの努力をはらっているのである。しかし、トロツキーの右の解釈が新イスクラ派「メンシェヴィキのそれよりもはるかに質が悪く、しかも俗物的である」ということを、われわれは指摘せずにはすまされない。なぜならば、トロツキーは、ソヴェトが「革命的な社会主義の精神において階級的政策を遂行した」と平然と書きたてているからである。「階級的政策」といえば、もちろん、プロレタリアートの階級的政策にほかならない。つまり、トロツキーは、ソヴェトがプロレタリアートの社会主義革命を推進する組織でなければならないと思ひこんでいるのである。これは、当面の革命を「即時のプロレタリア社会主義革命」でなければならぬとする例の「永続革命論」の見地からすれば、「首尾一貫した」解釈ともいえるが、しかし、「即時のプロレタリア社会主義革命」が根も葉もない観念的たわごとであるのとまったく同様に、ソヴェトを社会主義革命のための組織とする考え方が完全な妄想にすぎず、時代錯誤的たわごとでしかないことも、自明である。周知のように、一九〇五年十二月、モスクワ蜂起が——

テルブルグの労働者代表ソヴェトの日和見的不同調を一因として——失敗におわった理由は、右のような「革命的空文句」をふりまわしてメンシェヴィキの路線を守っていた「編集局のバラライキン」が、ペテルブルグ・ソヴェトの議長として納まっていたという事実をとらえることによってはじめて納得がいくのである。

(164) トロツキーは、例の自家宣伝的「自伝」のなかで、この『ナチャール』について、つぎのような言葉を、得々として並べている。——「この新聞の発行部数は飛躍的に増大していった。レーニンがいなかったために、ボリシェヴィキの『ノーヴァヤ・ジズニ』は、むしろさへなかった。他方、『ナチャール』はひじょうな成功をおさめた。わたしは、この新聞が、過去半世紀間に刊行された他のどの新聞よりも、その古典的原型である、一八四八年にマルクスによって発行された『ノイエ・ライニツシェ・ツァイトゥング』に似ている、とかんがえる」(ibid., p. 177)。

諸君、よく聞かれるがいい。このバラライキンの手になるメンシェヴィキ的新闻が、なんと、ほかのどの新聞よりも、マルクスの「新ライン新聞」に似ている、と自分の手で書きたてているのである。このひと言ほど、この醜惡な煽動政治屋の底知れずの厚顔無恥を天下に表明しているものはないといつてよい。

さて、最後にわれわれは、一九〇五年—一九〇七年第一次革命のなかでもっとも革命の高揚した時期、「革命的旋風」の時期と呼ばれる局面について、レーニンの記述とメンシェヴィキの評価およびバラライキンの説明とをつきあわせてみることにしよう。このさい、われわれは紙幅の制限を考慮して、きわめて教訓的な十月のモスクワ事件は残念ながら割愛することにし、十二月モスクワ蜂起だけについて、簡単な考察をくわえるにとどめよう。一九〇六年八月、レーニンは、『モスクワ蜂起の教訓』という論文をあらわし、その冒頭で、「目下焦眉の政治問題であるモスクワ蜂起の教訓をとりあげよう」と述べて、以下、つぎのように三つの教訓を説明している（……は中略を示す）。

「モスクワにおける十二月の運動の主要な形態は、平和的なストライキとデモンストレーションであった。労働者大衆の大多数が積極的に参加したのは、これらの闘争形態だけであった。だが、モスクワにおける十二月の行動こそ、

ゼネラル・ストライキが、独立の主要な闘争形態としては、すでに生命を失ったこと、運動はおさえようのない自然成長的な勢いでこの狭い枠をぬけだして、より高度の闘争形態である蜂起を生みだしつつあることを、はっきりと示したのであった。

すべての革命的政党、モスクワのすべての労働組合は、ストライキを宣言するにあたって、それが蜂起に転化するにちがいないことを意識していたし、またひしひしと感じてさえた。十二月六日には、「ストライキを武装蜂起に変えるよう努力する」ことが、労働者代表ソヴェトによって決定された。だが実際には、どの組織もみなその準備がととのわずに、武装隊連合会議でさえ（しかも十二月九日に！）、蜂起をなにか遠い将来のこととして論じていたのであるから、市街戦は、疑いもなく、この会議の頭上をのりこえ、その参加なしに進行したのである。組織は運動の成長と展開力に立ちおくれたのである。

ストライキが蜂起に発展したのは、なによりも、十月以後に生まれた客観的諸条件にせまられたためであった。ゼネラル・ストライキによって政府の不意をつくことは、もはやできなかった。政府は、すでに軍事行動の準備をととのえた反革命を組織していたのである。十月以後のロシア革命全体の進展も、また十二月にモスクワで事件がつぎつぎにおこったことも、マルクスの深遠な命題の一つ、——革命は、かたくむすんだ強力な反革命をつくりだすことによって前進する、すなわち、敵にますます極端な防禦手段に訴えさせ、そうすることによって革命はますます強力な攻撃手段をつくりだす、という命題をおどろくほどはつきりと裏書きした。

十二月七日と八日——平和的ストライキ、大衆の平和的デモンストレーション。八日の夜——アクヴァリウムの包囲。九日の昼——ストラストナヤ広場での竜騎兵による群集の迫害。夜——フィードラーの建物の破壊。意気は高ま

った。街頭の未組織の群集が、まったく自然発生的に、ためらいながら、最初のバリケードをつくった。

十日——バリケードと街頭の群集にむけた砲撃が開始された。バリケードの構築は、確信をもってなされるようになり、もはや個々ばらばらのものではなく、真に集団的なものになっていった。全市民が街頭にあった。全市のおもだった中心地は、バリケードの網でおおわれた。数日にわたって軍隊を相手に武装隊員の頑強なバルチザン闘争が展開された。この闘争は、軍隊を疲労させ、ドゥバソフ「モスクワ総督」に増援隊を要請させるにいたった。十二月十五日になってはじめて、政府軍の優勢は完全なものとなり、十七日には、セミョーノフ連隊が蜂起の最後の堡壘であるプレスニヤを撃破した。

ストライキとデモンストレーションから、ばらばらなバリケードへ。ばらばらなバリケードから、バリケードの大量構築と軍隊との市街戦へ。プロレタリアの大衆闘争は、組織の頭上をのりこえて、ストライキから蜂起へ発展した。この点に、一九〇五年の十二月がなしとげた、ロシア革命の最大の歴史的成果がある。この成果は、これまでのすべての成果と同じように、きわめて大きな犠牲をはらってあがなわれたものである。運動は、政治的ゼネラル・ストライキから、より高度の段階に引き上げられた。運動は、反動派をして抵抗を極限まで高めることをよぎなくさせたが、そのためにまた、革命のほうも攻撃手段を同じく極限まで使用する時機をひじょうに近づけることになった。反動派は、バリケードや家屋や街頭の群集にたいする砲撃以上の拳に出ることはできなかった。だが革命にはまだ、モスクワの武装隊員以上にすすむ余地があった。それにはまだ大いに拡がり深まる余地があった。そして革命は、十二月いらいさらに前進したのである。革命的危機の基礎は、はかりしれないほどさらに広がった。いまや、刃はいつそう鋭くときすまされなければならない。



プロレタリアートは、闘争の客観的条件が変化して、ストライキから蜂起へうつることが必要になったことを、彼らの指導者よりも早く感じとった。実践は、いつものとおり理論に先んじてすすんだ。平和的なストライキやデモンストレーションは、たちまち労働者を満足させなくなり、労働者は「このつぎはなにをするのか？」と質問して、より積極的な行動を要求した。バリケードをつくれという指令が各地区にとどいたのは、ひじょうにおそく、そのときには、中心部ではすでにバリケードをきずいていた。労働者は、大挙してこの仕事にとりかかったが、これにも満足せず、「このつぎはなにをするのか？」と質問した。――積極的な行動を要求したのである。われわれ社会民主主義のプロレタリアートの指導者は、十二月には、自分の連隊をあまりに不合理に配置したために、その軍隊の大部分が戦闘に積極的に参加しなかった司令官に似ていた。労働者大衆は、積極的な大衆行動の指令をえようとしたが、ついにそれを得ることができなかった。

こういうわけであるから、なにも時機尚早にストライキをはじめることとはなかったとか、「武器をとるべきではなかった」とかいふ、日和見主義者がこぞつてとびついた、あのプレハーノフの見解ほど、近視眼的なものはないのである。それどころか、もっと決然と、もっと精力的に、またもっと攻撃的に、武器をとるべきであった。平和的なストライキだけではどうにもならないということ、恐れを知らぬ、仮借ない武装闘争が必要だということを大衆に説明してやるべきであった。最後に、いまやわれわれは、政治的ストライキでは不十分なことを率直に公然と承認しなければならぬ。そして、武装闘争の問題を「予備的段階」というようなことでごまかしたり、それに覆いをかけたりけっしてせずに、きわめて広範な大衆のあいだで、武装蜂起を煽動しなければならない。きたるべき行動の直接の任務として、死にもぐるいの、血なまぐさい殲滅戦が必要だということを大衆にかくすのは、自分自身をも、人民を

もあざむくことである。

十二月の諸事件の第一の教訓は、以上のとおりである。第二の教訓は、蜂起の性格、蜂起の遂行方法、軍隊が人民のがわに移行する条件にかんするものである。……………モスクワ蜂起は、軍隊を獲得しようとする反動派と革命とのまさに死にものぐるいの、このうえなくはげしい闘争を、われわれに示している。……………われわれには、……………政府が着手してやりとげたのとおなじような、積極的で、大胆で、進取的で、攻撃的な闘争に、われわれのもっていた力をもちいることができなかった。われわれは、軍隊にたいする思想「工作」をおこなってきたが、これからもさらにねばりづよくおこなっていくであろう。しかし、蜂起のおこったときには、軍隊を獲得するための物理的な闘争もまた必要なことをわすれるならば、われわれはあわれむべきペダントだということになるだろう。

……………

十二月は、日和見主義者らがわすれてしまっている、マルクスのいま一つ深遠な命題を明瞭に裏書きした。すなわち、蜂起は一つの技術である、そしてこの技術の主要な原則は、死にものぐるいの勇敢な、断固決然たる攻撃である、と彼は書いた。<sup>(166)</sup>われわれは、この真理を十分自分のものにしていなかった。われわれは、この技術を、ぜがひでも攻勢をとるといふこの原則を、自分でも十分に学ばなかったし、大衆にも十分に教えなかった。われわれは、いや、われわれがなおざりにしていたことを、全精力をあげて埋めあわさなければならぬ。……………

モスクワがわれわれにあたえた第三の偉大な教訓は、戦術と蜂起のための勢力の組織にかんするものである。軍事上の戦術は、軍事技術の水準にかかっている。——この真理を噛んでふくめるようにマルクス主義者に説明してくれたのは、エンゲルスである。<sup>(167)</sup>こんにちの軍事技術は、十九世紀中葉のそれではない。砲兵にむかって密集して行動し

たり、ピストルでバリケードを守ったりするのは、ばかげたことであろう。そしてカウツキーが、モスクワを経たことにちではエンゲルスの結論を再検討すべきときである、モスクワは「新しいバリケード戦術」を提起したと書いたのは、正しかった。その戦術とは、**バルチザン戦争**の戦術であつた。……………

モスクワは、この戦術を提起したが、それを発展させ、多少とも広範な、真に大衆的な規模で展開するところまでは行かなかつた。……………われわれは、モスクワの経験から学び、この経験を大衆のなかにひろめ、またこの経験をさらに発展させるのに大衆自身の創造力をよびおこしながら、以上の欠陥を埋めあわせなければならぬし、また埋めあわせるであろう。そして十二月以後ほとんど絶えまなくロシアのいたるところでおこなわれているあの**バルチザン戦争**、**大衆的テロル**は、蜂起のさいの正しい戦術を大衆に教えることを疑いもなくなつておこなわれているであろう。社会民主党は、この大衆的テロルを承認し、それを自分の戦術にとりいれなければならない。(88)……………」(全集第四版、第十一卷、一四五—一五一ページ、傍点—レーニン、ゴシック体—山本)。

(165) マルクスは、一八五〇年、『**新ライン新聞**』に連載した有名な労作『**フランスにおける階級闘争**』の冒頭において、つぎのようなまえおきを述べているが、レーニンは、その最後の部分をここにかかげて、革命のいつその前進を強調しているのである。

「わずかに数章の例外はあるが、一八四八年から一八四九年までの革命年代記の比較的重要な各編はみな、**革命の敗北!**という表題をもっている。

これらの敗北において滅んだものは、革命ではなかつた。滅んだものは、まだ激しい階級対立をとるほどに尖鋭化してゐなかつた社会関係の結果である革命以前からの伝統的附属物——すなわち、二月革命までは革命党がふりすてることができなかつた、人物や幻想や観念や計画であつた。そして革命党は、二月の勝利によつてではなくて、一連の敗北によつてのみ、それらのものから解放されたのである。

一言でいえば、革命は、その直接的な、悲劇的な諸成果によって、その前進の道をきりひらいたのではなく、逆に、結束した強力な反革命を生みだしたことによって、つまり、それとたたかうことによりはじめて転覆の党がほんとうの革命党に成長することができるところの一つの敵をつくりだしたことによって、前進の道をきりひらくのである。

このことを証明するのが、以下の論文の課題である」（全集、第七巻、一一ページ、傍点—マルクス）。

「革命は、かたく結んだ強力な反革命をつくりだすことによって前進の道をきりひらく」——この決定的に重要な命題のもっている、きわめて奥深い、豊富な内容を十分に正しくとらえ、これをただしく実践に適用することは、この上もなくむづかしい。レーニンがこの命題をかかげて強調しているのは、いかに彼がこのうえもなくすぐれて的確に革命的マルクス主義理論を把握し、これを正確に適用しているかということを裏書きしているものである。また、中国共産党の指導者、毛沢東は、その重要な一論稿の中で、「闘争、失敗、ふたたび闘争、ふたたび失敗、さいごに勝利」という命題——法則をかかげてつぎのように説明しているが、これは右のマルクスの命題の内容とただしく合致しているものであって、こうした事実、レーニンとならんで毛沢東がまことに傑出した真のマルクス主義者であることを動かしがたく実証しているものといつてよい。

「帝国主義者の論理と人民の論理はこんなにもちがっている。攪乱、失敗、ふたたび攪乱、ふたたび失敗、さいごに滅亡——これが人民の事業に対処する、帝国主義と世界のいっさいの反動派の論理で、かれらはけっしてこの論理に反することはない。これはマルクス主義の法則である。われわれが「帝国主義はきわめて凶悪だ」というのは、その本性はあらためることのできないものだということをいっているのである。帝国主義者は、その滅亡の日まで、けっして屠刀を捨てようとするものではなく、また、けっして成仏できるものでもない。

闘争、失敗、ふたたび闘争、ふたたび失敗、ふたたび闘争、さいごに勝利——これが人民の論理で、人民もまたけっしてこの論理に反することはない。これはマルクス主義のもう一つの法則である。ロシア人民の革命はこの法則にしたがったし、中国人民の革命もまたこの法則にしたがっている」（毛沢東選集、第四巻所収、論文『幻想をすてて、闘争を準備せよ』、一九四九年八月十四日付、傍点—山本）。

（166）これは、エンゲルスが、その著『ドイツにおける革命と反革命』のなかで述べているつぎの一節を指しているものとかんがえられる。

「ところで、蜂起は、戦争や、その他の技術とまったく同様に、一つの技術であって、若干の規則にしたがうものである。その規則を無視すれば、無視した側は破滅をまねくであろう。その規則は、そういう場合に考慮すべき当事者と状況の性質から論理的に出てくるものであって、きわめて平明、単純なものである。一八四八年の短い経験によってさえ、ドイツ人はかなりよくこの規則をのみこんでいたのである。第一に、諸君の勝負から起こる結果を敢然として迎える十分な覚悟がないなら、けっして蜂起をもてあそんではいられない。蜂起は、きわめて不定な量もちいておこなう計算のようなものであって、その量の数値は日々に変動するかもしれない。諸君の相手の軍勢は、組織の点でも規律の点でも、伝統的權威の点でも、すべて有利である。きわめて優勢な兵力をもってこれに対抗しないかぎり、諸君は敗北し、破滅する。第二には、いったん蜂起の道にすすんだなら、最大の決意をもって行動し、攻勢をとれ。守勢はあらゆる武装蜂起の死である。その場合には、敵と戦いをまじえないうちに、すでに蜂起は敗北したと同じである。敵の軍勢が分散しているあいだにその不意を打て。どんなに小さい勝利でも、日々に新しい勝利をあげるように心がけよ。蜂起の最初の勝利によって得た精神的優越を維持せよ。こうして、つねにもっとも打撃力の強いものに従い、つねに安全な側をさがし求める動揺分子を、味方に引き入れよ。敵が諸君にたいして兵力を集結できないうちに、これに退却をよぎなくさせよ。歴史上に知られた最大の革命的政策の大家であるダントンの言葉をかりれば、大胆なれ、大胆なれ、かさねて大胆なれ！(De l'audace, de l'audace, encore de l'audace！)」(全集、第八巻、九五ページ、傍点—エンゲルス)。

なお、この労作のなかには、右と同様の趣旨を明確に説いている個所が他にもあるので、それを二つ、あげておこう。

「革命にあつては、戦争における同様に、大胆に敵と対決することがつねに必要であつて、攻撃する側が有利である。また、革命にあつては、戦争におけると同様に、決定的な瞬間には、勝算のあるなしにかかわらず、すべてを賭することがなによりも必要である。歴史上の成功した革命で、これらの格言が真理であることを証明していないものは、ただの一つもない」(前出、七七ページ、傍点およびゴシック体—山本)。

「革命においては、決定的陣地の指揮をとりながら、敵に実力でこの陣地の攻略をこころみるほかにいはいないで、その陣地を明け渡す人間は、どんな場合にも、裏切者として扱うのが至当である」(前出、七八ページ、傍点—山本)。

(167) エンゲルスは、マルクスの『フランスにおける階級闘争』(一八九五年版)への序文のなかで、これを詳細に説明してい

る。つぎにその部分を抜粋してお目につけよう。

「あの旧式な叛乱、つまり一八四八年まではどこでも最後の勝敗を決めたバリケードによる市街戦は、はなはだしく時代おくれとなっていた。

われわれはつぎの点について幻想をもたぬようにしよう。すなわち、蜂起が市街戦で、軍隊にたいして本当の勝利を得ること、二つの軍隊間におけるような勝利を得ることは、ひじょうにまれなことなのである。……彼らにとって重要なことは、……あの精神的影響によって、軍隊を脆弱化させることだけであった。……叛乱者側が、ほんとうに戦術的な行動でなしうることを言えば、せいぜい一つ一つのバリケードを本式に構築して、これを防衛することだけである。……おまけに、軍隊側は火砲や完全に武装し訓練された工兵隊を駆使しうのに、叛乱者側は、ほとんどすべての場合にこういう戦闘手段をまったくもっていない。だから最大の英雄的勇気を發揮してたたかったバリケード戦——一八四八年六月のパリ、一八四八年一〇月のヴィーン、一八四九年五月のドレスデン——でさえ、攻撃軍の指揮官が政治的な考慮にわずらわされずに純軍事的観点から行動し、しかも部下の兵士が信頼できた場合には、蜂起は敗北をもって終わったことは、なんの不思議もない」（前出、第七卷、五二〇—五二一ページ）。

(168) レーニンは、この「大衆的テロル」がえてして小ブルジョア的・無政府的反体制派によって俗物的にうけとられることを予想して、これについて、つぎのような「但し書」をそのあとに書きそえている。

「ただそのさい、このテロルを組織化し、統制し、労働運動と全般的な革命闘争の利益と条件に従属させ、このパルチザン戦争の「浮浪人的」歪曲を容赦なく排除し、切り捨てなければならぬことは、いうまでもない。パルチザン戦争のそういう「浮浪人的」歪曲は、モスクワの人たちが蜂起のときに、またラトヴィア人たちが有名なラトヴィア共和国事件のときに、実にりっぱに、実に容赦なく始末をつけたのである」（前出、一五一ページ）。

さらに、同じ一九〇五年末の時期についてレーニンは、一九〇六年三月に書いた労作『カデットの勝利と労働者党の任務』のなかできわめて重要な特徴づけをあたえているので、これについて簡単にそのあらましをみてみよう。右の労作のうちの「カデットの自己満足の見本」と題された第五節のはじめで、レーニンは、

「カデットの勝利と労働者党の現在の任務を評価するために、ひじょうに大きな重要性をもっているのは、現在の時期との相互関係においてロシア革命のそのまへの時期を分析することである。多数派と少数派が、それぞれ発表した戦術的決議草案は、この評価の仕方の相違と結びついた二つの方針、二つの思想傾向を明確にしている。読者にはこれらの決議案を参照していただくことにして、われわれは、ここではカデットの新聞『ナーシャ・ジーズニ』の一論文に立ちいりたい」（全集第四版、第十巻、二二二—二三ページ）

と述べて、エル・ブランクの小論『ロシア社会民主党の当面の問題によせて』の全文を引用してかかげ、これについてつぎのように論評をくわえている。

「以上が、ブランク氏の論文である。この「カデット」「立憲民主党員」のきわめて典型的な意見の出発点はみな、ストルーヴェ氏の『オスヴォボジデーニエ』や、最近の合法的なカデットの新聞を注意深く読んだ人なら、だれにもおなじみのものであるが、ここではそれらの意見が一つに組みあわされて、現在の政治的戦術の評価は、ロシア革命の過ぎさった時期の評価に基礎をおくというぐあいになっている。この過去の評価に、この評価が正しいか正しくないかということに、立ちいってみよう。

ブランク氏は、ロシア革命の二つの時期を対比している。第一期は、大体一九〇五年の十月から十二月におよんでいる。これは、革命的旋風の時期である。第二期は国会選挙におけるカデットの勝利の時期といえどももちろんまちがいはないが、先回りする危険をおかせば、多分、カデットの国会の時期と名づけてもよい、現在の時期である。

この時期について、ブランク氏は、ふたたび思考と理性の番がまわってきて、自覚した、計画的な、系統的な活動にかえることができると述べている。これに反して、第一の時期を、ブランク氏は、理論と実践との分裂の時期と特

徴づけている。社会民主主義の原則と思想はすべて消えうせ、ロシア社会民主党の創立者たちがつねに説いてきた戦術は忘れられ、社会民主主義的世界観の基礎そのものが根こそぎにされさえたというのである。

ブランク氏のこの基本的断定は、純粹に、事実に関係したものである。マルクス主義の全理論は、革命的旋風の時期に「実践」と分裂したという。

そうだろうか？ マルクス主義理論の第一の主要な「基礎」とは、どんなことか？ 現在の社会の、ただひとつ最後まで革命的な階級、したがってあらゆる革命において先進的な階級は、プロレタリアートである、ということである。そこで問題がおこる、革命の旋風は、社会民主主義的世界観のこの「基礎」を根こそぎにしたのではあるまいか？ 反対である。旋風は、それをもつとも美事に裏書きした。プロレタリアートこそ、この時期の主要な、最初のうちはほとんど唯一の闘士であった。ブルジョア革命は、大衆的政治的ストライキという純プロレタリア的な闘争手段を、もつとも進んだ資本主義国にも見られないくらい、きわめて大規模にもちいたという点で世界史上おそらく最初の記録をうちたてた。プロレタリアートは、ストルーヴェ氏らやブランク氏らがブルーギン国会にはいるように呼びかけ、カデットの教授が学生に勉強するように呼びかけていたような時期に、闘争に——直接革命的な闘争におもむいた。プロレタリアートは、そのプロレタリア的闘争手段によって、ロシアのために、あの「憲法」——と言えるようなものではないが——をかちとったが、それ以来この憲法は、けがされ、きりちぢめられ、ちよん切られただけであつた。プロレタリアートは、大衆的政治的ストライキと蜂起を結合する重要性に強い注意をむけたロシア社会民主党の多数派の第三回大会決議が、半年前に述べた戦術的闘争方針を、一九〇五年十月に適用した。「革命的旋風」の全時期、一九〇五年の最後の四半期は、まさにこの結合によって特徴づけられている。こうして、わが小ブル



ジョアジのイデオログは、もつとも恥しらずな、もつとも驚くべきやり方で、現実を歪曲したのである。彼は、マルクス主義理論と「革命的旋風」の実験的経験の分裂を証明するただひとつの事実も指摘しなかった。彼は、「すべての社会民主主義の原則と思想」、「社会民主主義的世界観のすべての基礎」をもつともかがやかしく確証した、この旋風の基本的特徴を人目につかないようにしようと試みたのである」（前出、二一五—二一六ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本）。

みられるとおり、レーニンは、「革命的旋風」の全時期こそ、一九〇五年四月ボリシェヴィキの第三回大会で決議された路線、すなわち、大衆的政治的ストライキと蜂起との結合の方針の正しいことを実証し、またこれを実現したものである、ということを確認し強調している。この、レーニンによって明確にされている歴史的事実と、さきに本論稿の「三十六」のはじめにかかげておいたバラライキンの執拗にくりかえしている断定——「ボリシェヴィキもメンシェヴィキも「マルクス主義的」インテリの閉鎖的な分派で、プロレタリアートをすっかりとらえていたなどというのは幻想にすぎない」——とを、こころみにつきあわしてみられるがいい。この恥しらずな煽動政治屋は、一九〇五年末メンシェヴィキと協力して活躍したと「自伝」のなかで誇らしげに書きたてているが、例の大論説のなかでくりかえし両派にあげせかけている下劣な唾が自分自身の顔の上にことごとくふりかかっていることに気がつかないほど、鉄面皮このうえもないのである。ところで、その「自伝」のなかには、つぎのような記述がみいだされる。

「十月ストライキの部分的勝利は、わたしにとって、その政治的重要性と同様に、理論的重要性をもった。はじめてツァーリズムをひざまづかしたのは、自由主義的ブルジョア、<sup>ブルジョア</sup>でも、農民たちの自然的な蜂起でもなく、インテリゲンツィアのテロ行為でもなく、労働者たちのストライキであった。プロレタリアートの革命的主導権は、議論の余地のない事実としてあらわれた。わたし

は、永続革命の理論が、その最初のテストに成功裡にたえたことを感じた。革命はあきらかに、プロレタリアートに権力獲得の展望をひらきつつあった。やがてこれにつづく反動時代の数年も、わたしをこの観点から動かすことはできなかった」(Ibid., p. 180. 傍点—トロツキー)。

みられるように、トロツキーは、ただ「労働者のストライキ」と書いているが、これはきわめて陰險悪質なごまかしであり、事実の歪曲である。十月の部分的な一時的勝利——というよりも、ツァーリズムの一時的退却というべきであるが——をもたらしたのは、ただの「労働者たちのストライキ」ではけっしてなく、まさに、全国的な大衆的政治的ストライキ、政治的ゼネラル・ストライキであったのである。しかも、この全国的な政治的ゼネ・ストは、さきに詳細にみたように、レーニンがうちたてた革命的戦術にただしくそって展開されたものであって、メンシェヴィキやバラライキンの日和見主義的戦術とはおよそ無縁のものである。そのうえ、この十月の一時的勝利はやはり一時的にすぎず、ツァーリ政府は、「詔書」のあとにただちにカザックの狂暴行為、ユダヤ人の虐殺、大赦されたばかりの革命的政治家の街頭での射殺、警察の庇護のもとに黒百人組がおこなう略奪、等々、革命闘争を弾圧するためのいっさいの手段をおおっぴらに行使したのである。そして、それゆえにこそ、さきにくわしくみたように、レーニンは、大衆的政治的ストライキから武装蜂起に緊急にうつる必要をくりかえし強調し、人民の武装蜂起、革命軍の創設・強化、そして武装革命権力の確立を唯一最大の緊急課題として最前面におしだし、事あるごとにロシアの革命的労働者と革命的農民をこの方向におしすすめるべく必死の努力をかたむけたのである。トロツキーはここで、「労働者たちのストライキ」による「部分的勝利」ということひとつをもってきて、それで「プロレタリアートに権力獲得の展望がひらかれた」と記しているが、いったい、「労働者たちのストライキ」だけでどうして「権力獲得への展望」などが得られるのか、ひと

つ説明してみるがいい。おまけに、かれは、図に乗って、この「労働者たちのストライキ」による「部分的勝利」なるものによって、かれの「永続革命論」は「最初のテストに合格した」などと書きたてている。いったい、「労働者たちのストライキ」のどこをおしたら、「即時のプロレタリア革命」という音<sup>\*</sup>が出てくるか、ひとつ聞かしてもらいたいものである。「専制の一時的讓歩」、「労働者たちのストライキ」、「プロレタリアートの権力獲得」、「永続革命」即時のプロレタリア革命——この四つの言葉は、誰が見ても相互に無縁のものであることはあきらかであって、これらのばらばらの言葉をなんらか関連のあるものとしてつなぎあわせようなどという芸当はいかなるペテン師といえども、できることではない。それにもかかわらず、トロツキーが、一九二九年にことさら著わした「自伝」のなかでこうした言葉を平気でつなぎあわせてみせていることは、この世紀的い<sup>\*</sup>かさ<sup>\*</sup>ま<sup>\*</sup>師<sup>\*</sup>が、「自伝」の読者を、したがってまた全世界の勤労大衆を、どんなに馬鹿にし愚弄しているかということの動かしがたい証左だといわなければならない。

一九〇五—一九〇七年革命にかんして当面研究すべき重要な問題点は、以上のほかにまだすくなくらず存するのであるが、すでに紙数を大幅に超過している事情もあるので残念ながらこれらはすべて割愛することとし、次節では、第一次革命以後の反動期についてのトロツキーの記述の吟味を通じて若干の結論をひきだすことをこころみ、これによって曲りなりにも本論稿の一応の結着にこぎつけたいとかんがえるものである。

(一九七四・二・一四)